



板橋区立志村第三小学校に
乳牛がやってきた

「わくわくモーモースクール」に 大歓声!



酪農体験学習の来場者の受け入れ時に再確認!

酪農教育ファーム活動で認証牧場に不特定多数の体験者を受け入れる際には、家畜防疫の観点から、病原体の侵入防止対策が重要となっています。今回は、乳牛とのふれあいなどを通じた酪農教育ファーム活動を実施する上で、受け入れ側の牧場が注意すべき点をまとめた資料を改めてご紹介します。

農水省が定めている飼養衛生管理基準では、家畜伝染病の発症予防及びまん延防止のために、関係者以外は牛舎などがある衛生管理区域への立ち入りが制限されています。この区域に入る場合は、専用の長靴や衣類の準備と使用が義務づけられています。

しかし、牛とのふれあい体験をする酪農教育ファーム活動では、不特定多数の来場者を迎え入れることから、すべての来場者に専用の長靴や衣類の準備をすることは困難です。このため、飼養衛生管理基準では、**牧場が一定の規則を作成し、地域の家畜防疫員から規則の内容が適切なものであると確認を取り、入場者に防疫対策の周知と協力を求めることで、例外として認められています。**

この規則に盛り込む内容は①衛生管理区域の設定②入場者への協力依頼③入退車両の消毒④入退場者の消毒⑤家畜の健康観察⑥異状確認時の通報ルールの作成となっています。詳細は農水省ホームページに掲載している「飼養衛生管理基準遵守指導の手引き」をご参照ください。

[飼養衛生管理基準遵守指導の手引き](#)

[検索](#)

また、中央酪農会議では令和4年3月、牧場などでの消費者交流活動を適切に実施するため、「交流活動における感染症防疫マニュアル」を策定しました。マニュアルでは、農水省の飼養衛生管理基準の内容を中心に、家畜(乳牛)とのふれあい活動を行う際の感染症対策の要点をまとめています。詳細は下記のワードからご参照ください。

[交流活動における感染症防疫](#)

[検索](#)

韓国で昨年5月に4年ぶりに口蹄疫の発症が確認されました。また、外国からの入国者数が増加傾向にあり、今後も家畜防疫に関わるリスクが高まっています。酪農への理解醸成に欠かせない酪農教育ファーム活動を円滑に進めるため、ご紹介した資料の内容を改めてご確認ください。

～お知らせ～

感動通信の「MILK CLUB」への統合について

いつも感動通信をご愛読いただきまして、ありがとうございます。諸般の事情により、感動通信は今号をもって現在の発行形態を休止し、今後は弊会が発行する酪農専門フリーマガジン「MILK CLUB」に統合いたします。

感動通信は平成11(1999)年の発行以来、25年にわたり、国内の酪農教育ファーム活動を取り上げてきました。全国の酪農家をはじめ、指定生乳生産者団体、農協、学校教育関係者のみなさまにおかれましては、取材などにご協力いただきありがとうございました。今後は、「MILK CLUB」を通じて、一般の消費者のみなさまにも酪農教育ファーム活動の輪を広げ、日本の酪農と牛乳・乳製品への理解醸成を図っていきたくと考えております。

引き続き、酪農教育ファーム活動へのご理解とご支援をいただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

令和6年4月 吉日
一般社団法人 中央酪農会議
酪農教育ファーム推進委員会

p. 2 face to face
Vol.74プレゼント企画

p. 4 - p. 7 COVER STORY
牛とのふれあいで命の絆を知ってほしい
板橋区立志村第三小学校に乳牛がやってきた
出前型酪農授業
「わくわくモーモースクール」に大歓声!

p. 8 - p. 9 IT業界から、酪農業への大いなる転身
牧場と牛が人生を一変させてくれた
酪農業界の活性化を目指し、
新たな息吹をもたらしたい

p.10 酪農教育ファームファシリテーターの役割を理解
令和5年度 酪農教育ファーム認証研修会を開催!

p.11 アニマルウェルフェア研修会
アニマルウェルフェアのウェブ研修会を開催

能登半島地震お見舞い

この度の令和6年能登半島地震により被災されました皆様、ご家族の方々に心よりお見舞い申し上げます。
また、被災地におきまして救急救助並びに復旧活動等にあたられている皆様に感謝申し上げます。
皆様の安全と被災地の一日も早い復興を祈念いたします。

一般社団法人 中央酪農会議 役職員一同

酪農教育ファーム活動とは?

「酪農を通して食やしごと、いのちの学びを支援する」ことを目的に、「認証」を受けた酪農家等が、主に教育現場と連携しながら、牧場や学校等で行う教育活動です。

認証を受けて活動を行う「場(牧場等)」を「酪農教育ファーム認証牧場」、認証を受けて活動を行う「人」を「酪農教育ファームファシリテーター」といいます。2023年3月末現在、全国で248の牧場等と515人のファシリテーターが認証を受けて活動を行っています。

詳しくは酪農教育ファームのホームページをご覧ください。

www.dairy.co.jp/edf/

酪農教育ファーム



アンケートに答えてプレゼントをGET Vol.74プレゼント企画

蔵王チーズのチーズ作りは酪農から始まります。
蔵王連峰の豊かな自然が育んだ牧草を食べ、
湧き出る天然水を飲んで育った乳牛は良質な牛乳を生み出します。
搾りたての新鮮な牛乳は、熟練の職人によってチーズへと生まれ変わります。
蔵王の大自然と酪農から始めるチーズ作りが、蔵王チーズのこだわりです。
蔵王の豊かな自然の中で育った牛たちの生乳を使用した
アイスクリームとチーズたっぷりのピザのセットを、
今号のアンケートにお答えいただいた方の中から抽選5名様にプレゼントいたします。
アンケートへのご回答をお待ちしております!



Morny's
『アイスクリーム&ピザ』セット

蔵王チーズ
ZAO NATURAL CHEESE

チーズ工場で作ったチーズを
アイスクリームにもピザにもふ
んだんに使用しています。



アイスクリーム 各2個入り

『ミルク』『チーズ』
『仙台いちご』

チーズアイスはミルクの中にク
リームチーズがポツポツ入って
いてくせになる食感です。



ピザ 各1枚入り

『ジェノベーゼピザ』
『トマト&ベッパピザ』

※必ず加熱してからお召し
上がりください。

今回の感動通信について、

ぜひご意見をお聞かせください。

今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。

※回答時間の目安は2分程度です。
※お預かりしたお客様の個人情報はプレゼントの送付のみに利用致します。

回答はこちらから
アンケートフォーム内に
記入欄がございます
<https://onl.sc/HzfYFfhw>



締め切り
2024年
5/15(水)

今日の酪農体験授業での福井校長先生の思い

いのちの温かみを感じて目覚める子どもたち



福井校長先生による哺乳

長い教師生活の中で、教育が難しかった子どもと接して心が折れそうになったとき、理解のある校長に相談してヤギと牛に出会わせていただきました。すると子どもたちが生まれ変わったように積極的になり、ヤギのためにいろいろ考えて世話を始めたのです。牧場見学にも連れていき、生乳のことやいのちの繋がりについて学びました。わくわくモーモースクールは子どもたちの心にきっと何かを与えてくれると信じ、念願叶って本日の開催となりました。

事後授業でウェビングマップに仕上げを書かせると、「牛のお乳は温かかった」や、「オス牛は2歳でお肉になる」など、牛について感じたこと、感動したことなどそれぞれの気持ちが描かれており、この取り組みが成功だったことを実感しましたね。この活動が多くの学校に広がるよう、酪農教育の素晴らしさを伝えていくため、今日の喜びを明日からの活力にしたいと考えています。

酪農家さんへの感謝の手紙とウェビングマップ



ウェビングマップ

酪農家さんへの感謝の手紙



全員で乳しぼりを体験し、命の温かみと絆を知る

子牛とのふれあいが終わると、次はもうすぐ8歳になる母牛のあられちゃんに協力してもらう搾乳体験です。埼玉県・吉田牧場の吉田恭寛さんがファシリテーターとして搾乳の説明をしていきます。親指を牛の乳首に



搾乳の方法を教える吉田牧場の吉田さん



生後2か月のキャプテンちゃん

見立てて、「乳首の根っこをしかり握って。強すぎても弱すぎてもダメ。握手をするくらい力のね」とコツを教わった子どもたちはみんな、自分の指を握りながら練習し、一人ずつ牛の前にしゃがんで搾乳を体験していきました。

上手に搾乳できる子もいれば、なかなかコツがつかめない子もいましたが、東京都・北島牧場の北島隆さんのサポートで手のひらに少しずつしぼることができると、みんな笑顔になりました。いつも飲んでいる牛乳と違って牛のミルクが温かいのは牛の体温が高いためと教わります。そのまま舐めてはいけません。ことや殺菌についても知り、牛乳がどんな工程を踏んで自分たちの元に届くのか段々と分かっていたようでした。

乳牛の命の連鎖を知り感謝しながらいただくことを学ぶ

子牛とのふれあいや搾乳体験を終えた後は教室に移動し、加茂牧場の加茂太郎さんがファシリテーターとして酪農家の仕事を紹介しました。牛舎のスライドを見せながら、ここで暮らす100頭の乳牛が全部メスであり、赤ちゃんを育てるために

出しているミルクを私たち人間がもらっていることや、美味しい牛乳をたくさん出すにはよい飼料が必要なことを親しみやすい口調で話してくれました。

子どもたちに牛は何を食べると思う?と聞くと、「牧草!」と元気な声が上がります。そこで牧草には麦やチモシーなどさまざまな種類があり、ほかにも大豆やトウモロコシなど100種類以上のエサがあるため、地域によってより使いやすく栄養価の高いものを選んでいく丁寧な説明しました。

さらに、オスとして生まれた子牛やお乳をあまり出さなくなった牛がどうなるかに話が及びます。最終的にはお肉としてみんなの口に入っている。命をいただいているからこそ、食事のときに「いただきます」と感謝しなければなりません。牛たちはこうしてミルクや肉を提供し、命を繋いでくれるのだから食べるものを残すのはとても残念なこと。そこをしつかり考えて食べるようにしたいね、と締めくくる加茂さんでした。

牛乳はなぜ白いの? 多彩な質問が飛び交い活気づく

すべての体験を終えた子ども

たちは搾乳を見学するため再度、校庭に集まり、あられちゃんの前で再び吉田さんの説明に耳を傾けます。ここでミルクカーが登場し、機械による搾乳を見せてもらいます。透明の容器にどんだんたまつていくお乳を見て「あんなに出るんだ、すごい!」と感心しきり。

あられちゃんが突然、ふんをしたのでみんな驚きます。吉田さんは牧草を食べている牛のふんは臭くないし作物のよい肥料になる、できた作物をまた牛が食べて循環していくと説明し、興味をもたせました。

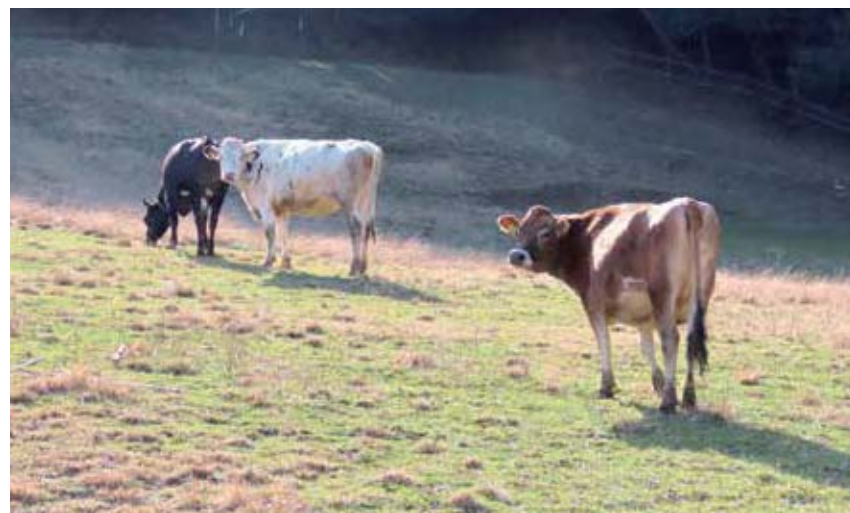
「牛乳はなぜ白いの?」と質問が飛んできます。次いで「耳についている乳は何?」「毛は何本生えるの?」と多彩な質問が飛び交いますが、吉田さんは近くにいた見学中の酪農家たちにそれぞれの質問を振って答えてもらいます。生乳はもともと血液でできているという回答に驚く子どもたちは、あらためていのちの絆を感じとってくれたようでした。

最後は一日頑張ってくれた牛と、協力してくれた酪農家たちにお礼を言って事後授業に移りました。貴重な時間を共に過ごし、子どもも酪農家たちもそれぞれが心に豊かなものを得たひとときでした。

牧場と牛が人生を一変させてくれた

酪農業界の活性化を目指し、新たな息吹をもたらしたい

IT(情報技術)企業に勤めるサラリーマンだった原正則^{はらまさのり}さんは、33歳のとき会社を辞め、千葉県館山市の須藤牧場で牛と触れ合う生活を選びました。以前から牧場や牛に癒され、その素晴らしさを多くの人に伝えたいと個人的に「うし活」なる普及活動をしていました。現在は、牧場で働きながら、日本の酪農業界を活性化させたいと日本酪農教育ファーム研究会の会員にもなり、酪農教育活動をサポートするなど知識やアイデアを活かしています。



日本酪農発祥の地・千葉で乳牛を約100年前に飼育したことから始まったという須藤牧場(放牧地)



須藤牧場入口のエンブレム

妻と通い続けた牧場で牛に癒され「うし活」を開始

日本酪農の発祥の地とされる千葉県は館山市の須藤牧場で、農場部長を務める原正則さん。イキイキと楽しそうに牛の世話をしている姿はいかにも手慣れているが、もともとIT企業の会社員でした。教育関連の現場に向きパソコンの修理ほか、先生方へのサポートや研修をするためのICT(情報通信技術)支援員の育成や派遣で全国を回っていたといいます。

今は妻となつている当時の恋人が動物好きで、北海道の牧場にアルバイトに行ったことから運命の歯車が回り始めます。その後、新婚旅行でその牧場を訪れたとき、青々と広がる牧草地の風景やのんびり牧草をはむ牛たちの姿に心が癒されるのを実感したのです。

それからは夫婦でゴールデンウィーク、夏休み、年末年始と北海道に通っては牛舎で作業を手伝い、牛と過ごすという体験を繰り返しました。「何が良かったのかわからないのですが、北海道で牛と触れ合っていると良いアイデアが



酪農業界の活性化への意気込みを語る原正則さん

生まれたりするんです。非日常に触れ、脳が刺激されて活性化したんじゃないかと笑う原さん。しかし周囲には牛に興味を持つ人が少なかった。「牛の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい、牛好きを増やしたくなりましてね」。そこで2013年、牧場や牛たちのことを発信する「うし活」というフェイスブックを立ち上げたのです。

牛への愛が止まらず会社員から酪農業へ転身

「うし活」を始めたのは、思いがけないことから千葉の須藤牧場を知り、牛の魅力を広めたいと相談に行ったことがきっかけでした。牧場なら東京の八王子や神奈川にもあることや酪農教育ファームについても教えられ、牛の情報を発信しようと思いついたのです。

会社員として働きながら週末、あちこちの牧場を巡っては写真を撮り、牛グッズなど牧場の商品を購入してはフェイスブックで紹介しました。

「牧場も2年間で90カ所は訪れています。とくに都市部に近い牧場は地域のひとと良好な関係を築くために、消費者交流活動を積極的にやっている牧場が多かったです」。牧場を訪れるうちに、日本の酪農を活性化するには現場をもっと

よく知る必要があると一念発起し、11年勤めた会社を辞めて夫婦で北海道へ移住し、1年ほど研修をしました。その後関東で働ける牧場を探し始めたとき、タイムミングよく須藤牧場が声をかけてくれて現在に至ります。今年で8年目を迎える原さんは今では、牛の管理や繁殖関連に精を出しています。

原さんのモットーは「一頭一頭、丁寧に飼育すること。それがひいては乳質を良くし、牧場の運営にも素晴らしい影響をもたらすことにつながっているのです」。

オンラインの牧場ツアーなどアイデア満載の酪農教育活動

原さんが懸念している日本の酪農業界の大きな課題に、酪農家の減少があります。赤字経営の



牛が自由に暮らすことのできる「フリーストール牛舎」

牧場が多く、廃業するところが年々増えていく現状を見過ごすわけにはいきません。「実際、業界の中に入ってみると見えてくるものがありました。雇用形態を改善し将来設計が可能な労働環境にしていかなければ、働きたい職業にならないと思います。ただ、酪農経営が改善するためには消費者へ牛乳や酪農の価値を伝えるなければなりません」と、原さん。「うし活」の当初、地域交流牧場全国連絡会の会員になり、酪農教育ファームファシリテーターの資格も取得し、日本酪農教育ファーム研究会にも入会しました。酪農業に転身した今は、会員たちと肩を並べて堂々と意見を交換できるのが楽しいと笑顔を見せます。

多忙な中、時間を作って仲間たちと牛乳の普及イベントにも参加しました。またわくわくモースクールにサポート隊として手伝うなど、精力的な活動を続けています。最近ではオンラインの牧場体験を「うし活」の仲間



一頭一頭、丁寧に飼育することが原さんのモットー



日本で稀少な品種とされる「ジャージー牛」



須藤牧場では「酪農を通じて豊かな世の中を作る」を理念に運営

と実施し、多くの親子が参加してくれたといいます。原さんは牛の赤ちゃんと誕生するところから成長の過程、飼料の与え方や牛舎の様子などを細かく撮影し、オンラインで映像を流しながら説明していきました。親子の質問に答え、クイズを出しながら酪農の喜びや牛のかわいさを伝えるなど双方の有意義な牧場体験を提供できたそうです。

「保護者の方が興味を持ってくれたのが良かったです。まずは大人に理解してもらえれば、そこから子どもにつながっていきますから」と感慨深げな表情をみせます。今後もオンライン牧場体験を定期的に開催し、効果的な普及ツールとして実績を積み上げていきたいと意気込みをのぞかせました。

牛の育成から酪農教育まで課題は多いが希望に燃える

「うし活」と呼んでいる牛や牧場の普及活動は、個人的な牧場訪問から形を変え、牧場改革や

須藤牧場

最高の環境と丁寧な飼育で乳質が最優秀賞を受賞

千葉県館山市の須藤牧場は、房総という夏は涼しく、冬が温暖な牛にとって最良の気候にあります。大正時代に始まり、現在は三代目の須藤裕紀氏が経営し、フリーストールでホルスタイン牛、ジャージー牛などを飼育しています。1999年から酪農体験を受け入れるなど、地域との交流も積極的に行い、2001年に酪農教育ファーム認証を受けました。2009年に酪農体験受け入れ施設を完成させ、当時は全国から小中学生が年間約3,000人も来場していたといいます。環境改善や飼料の研究が実り、関東生乳品質改善共励会において乳質が最優秀賞を受賞するなど地元でも優良牧場としてよく知られています。

酪農教育にも発展してきました。牛について伝えることも大事ですが、酪農業界を活性化するにはそれだけではなく、プラスチックでファームの酪農教育が大事と原さんは訴えます。「環境のこと、食育に関することを酪農家自身がきちんと理解した上で、その重要性を子どもたちに伝えていくことが酪農教育の意義だと思っています。だからこそ私たちももっと勉強しないとけません」。牛への愛から酪農業界の未来について広く深く考えるようになったという原さんは、今後も普及活動への手をゆるめず、課題解決へ向けて希望の灯を燃やし続けるようです。

令和5年度 酪農教育ファーム認証研修会を開催!

(一社)中央酪農会議は2~3月にかけて、令和5年度酪農教育ファーム認証研修会を大阪・札幌・東京の3会場で開催しました。今号では2月5~6日に開催した大阪会場の模様を紹介します。



意見交換をする参加者



ワークショップの様子



参加者全員で記念撮影

初日の5日は、(一社)中央酪農会議の星井久美子事務局次長兼業務部長が主催者挨拶をしました。星井事務局次長は、酪農業界において飼料価格の高騰が続いており、厳しい経営状況にあることや、令和5年

「酪農教育ファーム」これまでの歩み」を視聴後、「教えるor引きだす」をテーマに堀北先生によるワークショップが行われました。堀北先生はファシリテーターとは教えるのではなく、自発的に学ぶよう支援する役割を担う者であり、「知識だけではだめ、人を動かすことができるか、できないか」が重要であると強調しました。

参加者の感想のアンケートより

- 知らなかったことが沢山あった
- 改めて牛舎等を見直したい
- 子どもたちから質問を引きだせるファシリテーターになりたい
- 自分と違う意見を聞けて視野が広がった
- 酪農教育ファームの意義を伝えていきたい
- 自分がしていることの原因や新たな知識が学べた
- やってきたことは間違いではないと確認できた

「酪農教育ファーム活動における安全・衛生の基準」について堀北先生が講演しました。堀北先生は牧場にはどんな危険があるのか、実際に起きた事故の事例を提示し、参加者は事故を予測して対処することの重要性を学び合いました。

また、牛が怪我をしたときには、砂糖には病原菌の発生を抑える作用があることから、傷口に砂糖を塗り、ラップで巻く応急処置が伝授されるなど、参加者は思わぬハプニングに対する適切な対処法を確認できました。

二日目の研修会では、「酪農教育ファーム活動における安全・衛生の基準」について堀北先生が講演しました。堀北先生は牧場にはどんな危険があるのか、実際に起きた事故の事例を提示し、参加者は事故を予測して対処することの重要性を学び合いました。

また、牛が怪我をしたときには、砂糖には病原菌の発生を抑える作用があることから、傷口に砂糖を塗り、ラップで巻く応急処置が伝授されるなど、参加者は思わぬハプニングに対する適切な対処法を確認できました。

研修会の最後に参加者が1人ずつ立ち上がり、新たに酪農教育ファームファシリテーターの認証を取得した後の決意などを述べました。

普段は目にしないところを気づくことが重要

アニマルウェルフェアのウェブ研修会を開催

酪農教育ファーム推進委員会(事務局・一般社団法人中央酪農会議)は令和6年1月29日、地域交流牧場全国連絡会と共催で、アニマルウェルフェア研修会をウェブ形式で開催しました。酪農教育ファーム認証牧場のファシリテーターや交牧連会員の酪農家、指定団体担当者など約40人が参加しました。

消費者視点で家畜の飼養管理を再確認

国際的なアニマルウェルフェアへの関心が高まる中、農林水産省は令和5年7月26日に「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」を策定、公表しました。今回の研修会は、これらの動きを踏まえ、酪農家が消費者の視点で改めて、家畜の快適性に配慮した飼養管理を考えることを目的に開催しました。



牧場の人気イベント、動物のわくわくレース

研修会は中酪会議室を起点に実施しました。第一部では、農水省畜産局畜産振興課担当官が「アニマルウェルフェアに関する新たな国の指針について」と題して講演、昨年7月に公表した指針のポイントなどを解説しました。

第二部では、酪農教育ファーム認証牧場として酪農体験活動や消費者交流を実施している「らくのうまザーズ阿蘇ミルク牧場」(熊本県阿蘇郡西原村)をウェブでつなぎ、同牧場の坂本健太さんがコンダクターとなつて場内を紹介するオンライン牧場見学会を実施しました。

阿蘇ミルク牧場は、5種類の乳用牛(ホルスタイン、エアシャー、ガンジー、ブラウン)

「人のために頑張る家畜たちへの恩返し」が「アニマルウェルフェア」

坂本さんは、アニマルウェルフェアの観点から意識していることについて「搾乳体験時には牛の選定が一番大事です。人に慣れている牛を選んで搾乳体験してもらっています。観光牧場として見られているため、来場者がびっくりするようなことはしません。酪農の情報発信する場所なので、私たちが酪農の作業をするところが商品だと考え、自分たちを客観



飼料を食べる牧場の牛たち

的な視点で見えることを意識しています」と説明しました。

坂本さんはまた、「牛は生乳を生産して最後は肉となるすこい動物です。人のために頑張る家畜に、何かしてあげようというのが、アニマルウェルフェアだと私は思います。国の指針が策定されたことで、いろいろと注目されていますが、自分なりに家畜に恩返ししながら、酪農体験につなげていくことが大事ではないでしょうか」と語り、それぞれの酪農家が家畜への接し方を改めて考え、実践していくことが重要だと示唆しました。